

もう一回勉強したいねん。勉強したい。

語り手 佐古田（山田） 歩加（高校五期生 教育職）

聞き手 川浪 結子

*

部活と勉強の高校生活

―家族とかとの印象深い思い出はありますか。

とりあえず中高の時は部活ばかりやったんで。

―はい。

部活終わったら迎えに来てくれた。たまにね。電車通学してたけど、部活の日は土日が多いからお休みで迎えに来てくれたりとか、試合の時はいつも来てくれたりとか。

―すごい。優しいですね。部活は……。

ハンドボール部でした。

―ハンドボール部も中学からですか。

はい。

―なんで入ろうって思いましたか。

友人に誘われて入ったっていう。ハンドボールってあんまり聞き馴染みなくて。小学校の時とかあんまり（ハンドボールチームが）ないから、どんなスポーツかは知らなかったけど。やから、テニス部に入ろうって思って、またテニス部入りたい人がいっぱいいて。経験してる子はやらせてもらえるけど、経験してへん子は全然やらしてもらえへんから、そんなら嫌やなと思って、みんな同じスタートからのやつ始めようって思ってた。で、（友人に）誘ってもらったから入りました。

―合宿とかありましたか。

きつかった。

―きつかったですか。

合宿は行きたくなかったですね。

―放課後は毎日部活みたいな感じでしたか。

部活。部活。

―部活は、きつかったな、っていう印象が残ってますか。

どうやろな。部活があるから学校も行ってみたいな、そんな感じもあつたから、行きたいっていうよりは……。でも、目標みたいなのがあつたから、全国行きたいとか、そういう気持ちがあつたから続けられてたかな、っていう感じですね。

―大会とかは結構頑張っておられたんですね。全国行きましたか。

行つた。

―すごい。

何回ぐらい行つたんやろうな。中三の時に一回。高二、高三……。三回。行つたけど。はい、こんな感じです。

*

―「この先生の授業は楽しかったな」とか、そういうの覚えてますか。

授業も面白かったし、すごい凝ってはるなっていう感じは（覚えている）。みんなね。みんなすごい。ちゃんとプリント準備したりとか、今とはちよつと、学んでる内容が違うやろうけど、すごいこう、ちゃんと教えてくれようとしてるなとか、一問一答みたいなおもんない授業にならんように考えてはるなっていうのは、どの先生からも感じました。

―それは、先生になろうって思ってたきっかけとかやったりしますか。

そうやね。うん。元々、三年生になる前にはそういう道に行こうかなっていうのは決めてたから。

—そうなんですね。

うん、高一の時ぐらいかな。でもそれはいろんな先生の影響が少なからずあったかなっていう。そう思います。

—高校で文系を選ばれたと思うんですけど、それは文系に進もうっていうのはご自分の中では決まっておられたんですか。

うんうん、決めてた。理科は好きじゃない。

—なるほど。それは産業社会学部。

—そうですね。

—文系で二年生はどの社会科選択とか、どれとかどれとったとか覚えてますか。

—二年の時はなかった。

—なかったですか。

—二年の時はなかったから、みんなそうや。みんな同じやつやったと思う。三年から最後の一年だけクラスが別れたと思うねん。（卒業アルバムを見ながら）確かここまでが理系クラスやな。多分三組……、ここからが理系、四組から七組は全部文系って感じだったと思う。

—じゃあ文系と理系がクラス分けされたのは二年生からですか。

—クラス分けも三年。二年の時はみんな一緒に。

—そうなんですね。

—今とちよつと違うよな、クラス分け。

—はい。今は二年から別れます。

*

—産業社会学部に行こうっていうのは中学から何かリサーチとかをされてたんですか。どの学部に行きたいなとか。

中学の時は全然そんなのは知らなくて。で、高一の個人懇談みたいな、あるやん。三者面談みたいな。

—はい。

で、どういう仕事就きたいとかある？ みたいな、その当時の担任に言われて、ま、こういう感じのことしたいんですけどって言って、先生になるみたいな感じじゃなくて、子供に関わる仕事ができればいいな、教材作るとこもいいなと思って。ベネッセとか、ゼット会とか。

—はい。

—そういうのもいいなとか思ったり。だから、教育系とか、そっち系に進みたいなって思ってたんですけど言ったら、ちょうどその時ぐらいに、その産業社会学部のこども社会専攻っていうのができるってなって。ここやったら、唯一の教育系の学部やし、小学校の先生の教員免許も取れるよって言われて、じゃあそこにしようって、一年生のその三者面談の時に決めた。

—おお。決断がすごいですね。子供とかと関わりたっていうのは、小さい頃から思ってたんですか。

—思ってたました。

—そうなんや。それは、なんかきつかけがあったわけではなく。

昔から自分は、いいようにいったら平均ぐらいで全部できて、悪く言えばこれといって特別に秀でた特技があるわけではなく、かといって好きなものもなくて。じゃあどういふことをしたら将来楽しく仕事にできるんやろうなって思ってたんです。そこで、小学校の先生って、結構マルチに何でもこうできるイメージが自分の中ではあって、一番これやりたい、できそう、って学生の頃に思ったのがきつかけやと思う。それと下の子もいたし、遊んだりお世話したりするのとかも好きやったから。っ

ていうぐらいの入りやけど。でも、ちっちゃい頃からピアノやったり水泳やったり、いろんなことを平均人並みぐらいにはできてんけど、「これが好き」みたいなものがあんまりなかったから。そういう特技みたいなのがあったら、それが繋がる仕事を目指しやすいけど。だから今の仕事になったんかなっていう感じです。

―なるほど。今の仕事はどうですか。今思って、なってよかったとか、こういうのはやつばきついなとか。

あるある。きついこともあるし、もうやめたらうかな思うけど、嫌で辞めたとしても、きつと、こういう仕事にまた巡り巡っては戻ってくんねやろうなっていう気はしてる。それなりにやりがいもあるし、いいかなって思ってます。

*

―立守から産業社会の同じ学部の特攻に行った人は割と多かったですか。

三人。

―三人ですか。

うん。三枠しかなかったから。

―それはどういう風に決まったんですか。その三枠。行きたい人、多かったですか。

多かったと思う。貼り出されへん？　そういうのって。

―はい。

この枠にこんだけおりますよみたいな。

―あります、あります。

それで結構、行きたいって書いてた人が多くて、溢れてて。入れればいいなって。

―三枠やったら結構少ないですもんね、それって勉強で入るわけじゃないですか。高一の時にいきたいって思って、それから勉強頑張っておられたんですか。

そう。高三はみんな頑張るやん。

―そうですね。

みんな頑張る時に、自分頑張っても同じやから、私は一年、二年の時に先頑張つていたろうと思つて、一年、二年の時にめっちゃやった。別に遊びに行くとかもなかったしなあ、部活しかやってへんから、部活、部活、勉強、部活、勉強。みたいな感じやし、どうするか。やったら勉強もやつとくか。みたいな感じや。

―そうなんですな。

*

忙しかった文化祭と充実した時間を過ごした海外研修

―文化祭については、何か覚えてるというか、印象に残ってることはありますか。

いや、文化祭とか体育祭とか正直、放課後は部活に行かなあかんから、全然そこに時間を割くことができひんから、あんま、ない。多分劇に出る子とかは、めっちゃ頑張つてやつてはったから、思い出あると思うねんけど。ずっと大道具の色ばかり（塗っていた）。同じハンド部の子と。うちのクラスはハンド部何人おったんかな。三か、四人いたんやけど、（卒業アルバムの写真を指差しながら）私と、この子と、あとこの子もなんやけど、この子は執行部で、生徒会の。

―はい。

で、そっちもなんか、兼部じゃないけど、兼ねてたから、プレイヤーとしてはしてなかったな。でも、この三人（同じクラスのハンドボール

部のメンバー」は放課後すぐ行かなあかんから、ひたすらその……、準備期間の六時間で、その授業ない時間に、「今（準備するもの）ある？」って（聞いて）。忙しかったです。

―忙しかったですね。

でも面白かったよ。今ってさ、どう？ 今の高校生がどうなんかわからへんけど、そんな変わらへんと思うねんけど。なんかやつぱりさ、目立つ男の子、女の子と、そうじゃないっていうか、色があるやん。グループの色があつてさ、すごい目立ってるみたいな感じのグループ、別に喋れるけど、そういうタイプでもなかったし。でもそうじゃない男の子とかめっちゃおもしろいから、なんかそういう人らの新たな魅力を、この（写真を指差しながら）なるみちゃん、なんと開発しまくってた。そんな感じ。

―おもしろかった男の子いますか。（卒業アルバムを見ながら）

え……、このクラス？

―はい。

（数秒沈黙）ここ男子少ないな。

―思いました。少ないですね。

そう、十五人しかないな。これでもさ、全員で三十八人ぐらいおるやん。男子は理系にいっぱいいるねん。

―そうなんですね。

ほら、多くない？

―多いですね。あ、樋口先生、今もおられます。

中二の時とかに担任やった。

―そうなんですね。

おもしろいっていったら、今この人は YouTuber になってる。

―すごい。

（検索したら）出てくるからすごいで。小林っていうねんけど。

―小林さん。

小林さんって打つても出てこないで。おもしろいかな。なんかもう、うちの感覚ではわからへんけど、変わってる感じやった。でも、良かってんな。そういう変わってる人、良かってん。

―楽しいですね。変わってる人と喋って。

高二の時とか。色んな、もつと違うメンバーが……。メンバーが全然違ったからさ、なんか TikTok とか、YouTuber とかになってる。

―すごい。

（中学時代のアルバムの写真を見ながら）

―あ、当時も「あすなる祭」だったんですね。

あすなる祭。

―今も「あすなる祭」なんで、ちよつとびつくりしちゃいました。

そうなんや。これもね、全然覚えてないんですよ。前夜祭とかある？

―後夜祭があります。前夜祭はないけど。三年生は劇ですか。

劇。立て看板とか色塗ってました。文化祭はあれやな、体育館でやるやつ……。ちやうか。そうや、この時からや。こういうアスレチックみたいな残ってるん？

―ないです。すごい。こんなあったんですね。

普通に（アスレチックが）できて。なんであんな作らはったんやろうな。

―体育館ですか。

違う違う。外にな、こういうな、すごい高い壁とか、丸太とかできてる。これをみんなでやって。暇やったんかな。（笑）。

—さつき体操服が写ってましたけど、ビブスは今とほぼ同じですね。

でも高校の時、(ロゴが「R i t s」から)「R」になったんよ。なんか買い替えさせられた気がするけど。そう、それも大変やったで。なんか、「R」と「R i t s」のせめぎ合いみたいな時。ちょうどそう。中入生はみんなこれ(ビブスのロゴがR i t s)やねん。靴下とかもこれ(R i t s)入っててんけど、高校で「R」になったから、これ(R i t s)も「R」も持ってて。「R」、「R i t s」みたいな。

*

—(卒業アルバムを見ながら)これは海外研修ですか。
はい。

—どこに行かれたんですか。海外研修。

中学はニュージールランドじゃない? みんなで。

—今は中学は三つから選びますね。カナダとオーストラリアとニュージールランド。

—選べんねんや。中学もうちの時はみんなニュージールランドやって。

—みんな、じゃあ一緒に。

—一緒、一緒。楽しかったな、ニュージールランド。

—なんか覚えてますか。何かその、面白かったこと。

—面白いエピソード。

—はい。

—なんか学校みたいなどこ行くやん。こういう(指差しながら)。で、クラスに「みちぞう君」っていう子がいてんけど、みちぞうってさ、ローマ字で書いたら Michizo で、ぞやん、最後。

—そうですね。

それを先生が最後の日まで「ミチズー」ってずっと言ってる、何回も「みちぞう」って言ってるのに全然直らへんくて、ふふ、それぐらいの記憶しかない。ほんまに「ミチズー」ってずっと先生言ってた。

—なんかそういうのって覚えてますよね。本当楽しそう。
うん、これは楽しかったな。

—体操服ですね。

—体操服やな。え。体操服で飛行機乗ったかな。そんなわけない。恥ずかしすぎるよ。今実際、子供がいて、中三で海外行くって、しかも一人で。すごいなって実感して。よく送り出してくれたなっていう。みんなどの家もそうやけどな。

—高校は自分で(コースを)選びましたか?

—選べたで。うん、多分選べたと思うで。バンクーバー、シドニー、シカゴ、バンコク、タスマニア。

—はい。

—私はシカゴです。

—シカゴ楽しそう。

—楽しかった。これも楽しかった。今もあるやろ。シカゴ(コース)。

—シカゴコースあります。

—多分コーディネーターさんとか一緒やで。

—そうなんですね。すごい。一番、大変なコースというか。

—難易度の高いコースや。

—そうですね。

—なんで選ばれたんかわからへん。

—勉強とか頑張っておられたからじゃないですか。

好かれてたんかもしれんし、めっちゃ賢くはなかったかもしれんけど、努力だけ是可以るやつて思われてたんかもしれん。こういうのを、いっぱい叶えてくれはった。推されてたのかな。推されてたんかもしれん。

―印象残ってることとか。

食べ物はいれやけど、ついですぐ食べたこのシカゴピザがでかすぎて、泣きそうになった。

―シカゴのピザでかいって聞いたことあるけど、そんなにでかいですか。

これ、ほら、ケーキみたいな。

―へえ、ほんまや。

それこそホストファミリーの家でもでかくて、庭だけで（一般的な日本の）家二個分のサイズ。

―すごいですね。

アメリカで感じやったから。でもこのコースは、あれやね、学校じゃなくて。企業体験みたいな。

―そうですね、今もそうです。

そんな感じやって、それがちよつと大変やったかな。

―全部英語ですもんね。

しかも、有名企業っていうか、すごい企業ばかりやったから。で、今って、iPadとか、普通に一人一台みたいな感じになってるけど、この時に初めてこのコースだけ、そういうのがあるやつて言われて、iPad、渡されたんよ。どう使えばいいかわからへんくて、とりあえず資料作る、みたいなのは使ったけど。そういうのが、この時だけ、ポーンって渡されてな、あんまり使えへんなって思った。

―スマホとかは、

スマホは持ってたよ。うん、高二ぐらいの時にギリiPhone。

―みんな持っていましたか。

まちまちや。

―まちまちでしたか。

―ガラケーでLINEできるの知ってる？

―え。知らないです。

ガラケーでLINEできんねん。そうなんやで。ガラケーしてる人と、iPhoneしてる人いて。メールとかもな、面白かったんやけどな。

―メールとかも使っていました？

楽しいね。メールとか。もうなんか、いいな。LINEとはまた違います。

*

もう一回、りつものの授業を受けたい

―高校の時に一番、「もうちよつとこれやつとけばよかったな」とかそういう思いはありますか。

もう一回勉強したいねん。勉強したい。勉強したい欲がめっちゃ最近あって。大人になったらわかるねん。今の仕事目線で言うと、この先生、授業どうやって組み立ててんやろなとか、どんな発問作ってんのかなとか、どこに活動のあれ持ってくんやろなとか。そういうのを当時は思ってた。はよ終わらへんかなと思う授業もあったけど。今思ったら、やつぱどの先生もちゃんと構成を組んでやってはるわけやから、その先生の授業のこだわりとかを知れたらいいなと思って。ほん

まに一日でいいから受けさせてもらいたい。めっちゃ面白そう。小学生
ってよくゴールの姿を見据えてとか私らの職種では言うけど、小六の姿
をゴールのように小学生みんな目指して、一年からずっと指導していく
わけで。でも、そこだな、小六で終わりじゃないし、その先、中学、高
校っていうゴールもあって。しかも、自分自身が経験してきた中高生像
と、今の高校生って全然違うと思う。時代の違いとか教育の進化とかが
全然こう、アップデートされてないから、自分の子供やクラスの子とか
を育てていく上でも不利っていうか。そこを自分がアップデートしいひ
んかったら、伝えられることの幅が狭まるんちゃうかなっていうのは最
近すごい思うから。今、ほんまにリアルな高校生とか中学生はこういう
勉強してて、そのために小学校ではどういう力をつけていかなあかんっ
ていうのを知りたいから。ちよっとお願いして(笑)。

―立守に一日。

ほんまに。ほんまに知りたいねんな。公立の中学の先生と喋ることっ
て結構あって、それこそ夏の研修とかでも、こういうことしてますと
か、こういう勉強してますって。でも、公立中学ってさ、学力の開きが
あるし、集団の中間あたりに焦点を当てていかなあかんから、そんなに
大きく変わってるかっていったら、まだ多分そんなに進歩って追いつい
てないと思うねんけど、多分私立はすごいよね。私立の上の層の子たち
っていうか、多分、これからどんどんいろんなところに出て活躍してい
く子たちがやってる勉強って、どんなもんなんかなっていうのを知りた
い。多分、純粹にそれが自分の仕事にかかっていく立場やから、だから
こそ余計知りたいなっていう気持ちはすごいあるけどね。あかんかなっ
て。新学期、いつから始まるん。

―新学期、九月一日です。

そうやな。

―また田辺先生にお願いしておきます。

そう、時間ある時が今ぐらいしかないんですよ。

―やっぱり忙しいですか。

授業始まっちゃったらね、ストップできないから。

―そうですね。子供たちは毎日来るわけでもね。

走り続けるしかないから。勉強したいですって言ってもね。考えてほ

しいんやけど。

―なかなかですか。でも、言っておきます。今日は本当にありがとご

さいました。

(次ページへ)

【感想】

私は、このインタビューを通して、社会人の方と学生である自分が同じ学校に通った者として、学校行事のことや先生のことなどを話すことができるのは、創立から二十年という年月が経過している立守ならではのなんだと実感するとともに、二十年という時間の重みを改めて感じることができました。

また、佐古田さんのお話の中で、もう一度立守の授業を受けたいという話があり、将来、高校生をやり切ったと思えるくらいに、今の学校生活をもっと充実させていきたいと強く感じました。



左 語り手 佐古田歩加さん

右 聞き手 川浪結子